

大自然に親しむ者

大きな石の顔

北米合衆国の小説家、ナサニエル・ホーソンの「大きな石の顔」という作の梗概を紹介する。

一人の母とその子誠之助とは山の中の盆地に住んでいる。

その盆地からは、遠く隔てた山の麓に、大きな石が並び重って、遠くから眺めると、それがちょうど人の顔の形に見えて来る。「大きな石の顔」とはそれをいうのである。子供たちがこの大きな石の顔を自分の前へ置いてだんだん大人になって行くということは、しあわせなことであった。なぜかというに、その眼鼻や口つきは気高く、その様子は大まかで優しく、ちょうど一切の人類を自分の愛情のうちへ抱き込んでなおあまりあるような、ひろびろとした温い心の燃え上っているようであったから、たゞそれを見ただけで一つの教育になった。

子供の誠之助は、丸太小屋の前に坐つてその母から、「大きな石の顔」について話を聞く。

この盆地では昔から一つの預言が次ぎ次ぎと言い伝えられた。

大体の意味は、いつか将来この近所へ一人の子供が生れて来るが、その子供はその時代に一番、賢い尊い人物になる運命をもつていて、大人になると、その容貌はこの「大きな石の顔」に生きうつしになって来る、というのであった。

今では、この盆地の人たちはただ毎日の仕事におわれて、ほんとうにくだらない話に過ぎないときめてしまった。

この話を聞いた誠之助は、

「ああ、お母さん、わたしはその人の来るまで生きていたいものだ」と言う。

母は情愛の深い考えのよい女であったので、小さい子供ののんびりした希望を挫かなかった。そして言った。

「その人に会えるでしょう」と。

若者は丸太小屋で育つて、仕事しながらおとなしい落ち着いた神妙な若者になった。野へ出て骨折し仕事をするために、顔は日に焼けたけれど、その眼もとに輝く智慧は立派な学校で学んだ世の子供たちの及ぶところではなかった。けれど彼には、あの大きな石の顔が教師であっただけで、外には教師というものがない。毎日の仕事が終わるときつと、二三時間も、石の顔を見つめて、しまいにはこちらから尊敬して見ていると、石の顔も自分の方を見て、親切な笑いと勇気を与えてくれるように思われた。

大成金

この盆地に一つの噂が立った。大きな石の顔に似た偉い人が出たと。この盆地に住んでいたことのある若い男が遠国の貿易港で商業をして大成功をし、非常な大金持の商人になった。山のような身代、あらゆる宝、貴重なダイヤモソド、真珠、黄金の山、そんな数えきれぬ財産を持つて大成金は、この盆地に帰つて静かに晩年を過そうと決心した。立派な御殿を立てさせるために、優れた建築家来る。口では言えぬ大

理石の大建築が出来る。全ての美、全ての華、金と銀とが室内に燦として眩ゆい。人の口は愈々石の顔に似た大人物が帰って来ることばかりに使はれた。

とう／＼その日が来る。黒人白人の召使いの長い一隊が来る。誠之助はいよ／＼長い間の望みが達せられる日の来たことを喜んで見物に出ている。彼が山の方を見返すと何時もの通り大きな石の顔は親切に誠之助を見返してくれる。四頭だての馬車は威勢よく走って来た。馬車の中には年老った黄色の皮膚をした男が見える。

「大きな石の顔に生き写しだ。」と人々がさわぐ。

誠之助は大いに迷った。

大成金は、路傍の女の乞食たちに、銅貨を放りだしてやった。

誠之助ばかりは、似もつかぬ大成金の顔を見て失望し力を落した。

落ちかかった夕日を受けた山の石の顔はその湿和な眉を動かして

「その人はきつと来る。心配するな。誠之助、そのえらい人はきつと来る。」と言っているようであった。

血雷老将

又何年かの月日は立った。誠之助はもう立派な青年だった。

仕事に熱心で、人に親切で、よく精を出して働く、義務を怠らぬ青年だという外には、山に行つて例の石の顔を毎日見る以外に別に別に変つたところはないと村の人たちは見ていた。けれど、かの石の顔が自然に青年の心を開いて、他の人よりも、同情ぶかしく、本で尊んだものよりも一層よい智慧が出て来、いつそう立派な行いが出て来ることを知らなかつた。

誠之助自身も、彼がたつた一人いる時に自然に湧いてくる思想感情は、他の人たちと一緒にいるときよりも、ずつと気品の高いものであることを知らなかつた。

その内に大成金は気の毒にも死んで土の中に埋められてしまった。

死ぬる前から、財産が無くなつて、たゞ皺だらけの黄色い皮膚で包んだ生ける骸骨と、落ちぶれた商人の賤しい人相とが残っていた。山の脇のあの気高い石の顔との間に似たところもないことはもちろんのこと。

大理石の御殿は旅行者のはホテルに変わった。

この頃またこの盆地は盛んな評判でにぎわつた。

血雷老将というあだ名をとつた勇将が今度、この故郷の盆地に帰つて来るというのである。しかもその武勳赫々たる老将軍の顔は、かの『大きな石の顔』とそっくりだというのである。

老将軍の帰る日は来た。礼砲がうたれる。伝令使が来る。人気はずばらしいものであつた。血雷老将が帰つて来ると、大園遊会が開かれる。あまり人が多いので、誠之助はこの待ちに待つた名高い来賓の顔は見えぬ。

風に翻る勝利の国旗、護衛隊の銃剣の音、続く祝辞や、演説や、雷のような万歳の声。

「全く瓜二つだ。」

「ほんとうにまあこう似るのも不思議。」

「よく似たもの、あの人こそほんとうに古今を通じての最大偉人だ。」
と人々が湧きかえるようだ。

「そら將軍だ、將軍だ、静かにしろ、いま血雷老将の演説がある。」という声がする。
老将はあらゆる讚美の中に立った。

肩の金筋が光る。そして同じ方角に森の間から例の大きな石の顔もよく見えた。
老将の顔は似ていたろうか。

あわれ、悲しや。誠之助は、それを認めることが出来なかった。

戦争に倦みはてた、艱難苦勞をした顔つきに、なお元氣のある鉄のような意志は認められるけれど、高い智慧と、深く博いやさしい同情とは全くなかった。

「これは預言のなかの人ではない。そうすると、まだまだ待っていないければならぬ。」
と言いながら、あの懐しい、慈愛のこもった石の顔を見た。

今日にかぎつてことさら夕日に輝く顔は、

「心配するな誠之助、少しも心配することはない、その人はきつと来るから。」と言っているようであった。

大政治家、大統領の石顔翁

誠之助はいまや中年の男となった。

彼は人の知らない深い徳と、高い智慧の持主であった。身分こそ賤しかったが、この男が生きているために、世の中がいくらかづつ善くならなかったという日はただの一日もなかった。彼は自分の道を進む以外に、一步もわきへ逸れなかったが、それでも始終その恵が隣近所の人へ行き渡るのであった。

自分でも知らない間に一方では説教者になっていた。飾り氣のない純な高い考えが形に表れて行いとなり、言葉となつて人間の行いを鍛えあげてゆく、けれど人たちは決して彼がえらいとも思わないで、ほんに、友だちの言葉として聞いた。

血雷老将の毒々しい人相は石の顔とは似ていぬことを人々が知った頃、再び世の中は騒ぎ出した。

この村から出た一人の大政治家があつた。ただ一枚の舌をもつてどんな芸当でもする大政治家、一度叫べば、戦争の爆発であり、平和の歌である。世界中にひびき渡る大雄弁、とうとう彼はその舌一枚で大統領になろうというのである。しかもその政治家は、石顔翁という渾名で知られた人である。石顔翁の故郷訪問、盆地は大騒動となった。

石顔翁の来る日だ。

騎馬行列、制服の士官、議員、州の執行官、新聞記者、何という盛大な、何という立派な光景であらう。美しい音楽につれて、狂ったような出迎への人たちの間へ、彼の政治家は帰つて来た。

「万歳、石顔翁万歳」

「それそこへ来た。見ないか、石顔翁と老人山の方を、まるで双子のようだ。」

華々しい行列の真中ごろに、四頭の白馬に引かれた馬車の中の大政治家を見た誠之助は、「あら、似ているか知らん」と思つたけれども、どことなく足りないところがあつて、その凹んだ眼の奥の方に、絶えず陰気な疲れを帯びていて、ちょうど自分の玩具よりも大きくなりすぎてしまつた子供か、又はえらい才能があつても、眼のつけどころが小さくて、いつも立派な手並を見せるにかかわらず、一度も高い目的が実質を与えないために、その一生を空々寂々に過してしまつた人のようであつた。

「ちつとも似ていない」

誠之助は失望して鬱ぎこんだ。

騎馬行列や、旗行列や、音楽隊、馬車などが通りすぎて、砂塵がしづまると大きな顔は、ふたたび、その幾世紀だか知らない昔から具えている雄大な姿をもつて、眼の前に現われて来た。

「こつちだ。誠之助、わしはここにいろよ、お前よりもわたしの方が待ちこがれているのだ。しかしまだ疲れはしない。心配するには及ばないぞ、その人はきつと来る。」とそのやさしい眉が言うようだった。

それから長い年月は経つて、誠之助の頭にも霜をいたゞき、額には重味のある皺が出来た。彼は年を老つたけれどもむだに年寄にはならなかつた。

尊い智慧は増して今はもう世にかくれた者ではなかつた。

多くの人が求めてやまない名声は、求めず願わずして来た。彼の名は世界中に知れて来た。

大学の先生や、大都会のえらい人たちがまでがわざわざ彼を訪ねてその話を聞きに来た。なぜというに、この質朴な農夫は外の人とちがつて、本などから得たのでなくて、もつとく、尊い高い調子、穏かで親しみ易い気品のある調子から得た考えを持っているという評判が広く行きわたつた。どんな人を迎えた時でも、彼は優しい真心をもつて迎えてなんでも自由に話した。

その頃ある大都会には、この盆地の生れであるところの大詩人があらわれて、あの「大きな石の顔」の威厳のある肩で歌われても恥かしくない位の立派な詩で故郷の山や、石の顔を讃めたたえた。

この詩人が一つ山を歌えば、すべての人間の目は、前に見た時よりも、一層雄大な気が、その山腹に休んでいるか、その山頂に飛び廻っているのを認めた。

その題材が湖であれば、天下の笑いがすぐその上に落ちて永久に水面に輝いた。これが太古からの大海であれば、この深くて底の知れない恐しい水までが歌の情に動きだしていよいよ高くうねるようであつた。

誠之助は、ついこの詩人の作る歌に親しみはじめた。毎日小屋の入口に腰をかけて例の石の顔を見ながら、その歌を読んだ。

魂が動かされるような句へ来ると、

「ああ尊い友よ、この人こそあなたに似てもよいでしょうか。」とつぶやいた。

ところがこの詩人も、誠之助の習わないで得た智慧と、立派な淳朴な生活とを知りたいものと思っていた。

ある夏の朝、その世界的な大詩人は、この盆地に来て、誠之助の家に厄介になろうと戸口に立った。見ると人好きのよい老人が本を一冊持つて、ときどき読んでは、真心こめて、大きな石の顔の方を見つめている。二人はすぐ仲のよい友達となる。二人とも相手の心の尊く美しいのに驚いてしまう。二人の同情は、一人ではどちらも持つことの出来ない深い意味を互いに心に教えあつた。二人の心は一つの琴線へふれて、それがどちらも自分の音であるということもできないし、又自分の音と相手の音を区別することも出来ないような、いかにも心持のよい音楽を奏するようだった。

誠之助は、石の顔を見ながら聞いた。

「あなたはわたしにとつては、珍しくも天から授けられたようなお客様ですが一体どなたでいらつしやいます。」

「あなたはその詩をお読みになるのですか。それでは私を御存じです。それは私が書いたのですから。」

誠之助は聞いて熱心にその客の顔を見直し、それから「大きな石の顔」を見、又客、又石の顔、心配そうに何度も見たが、彼の顔は自然にうつむいた。

頭をたれて溜息をつく。

客の詩人がそのわけを問うと、誠之助は、

「わたしは一生涯、あの預言の現れて来る時を待つていました。そしてこの詩を読んだ時、この詩をつくった貴方こそと思つていました。」

「あなたは私があの素直な石の顔に似ているだらうと思われたのですか。それに望みが又はずれたので失望なさつていられるのです。私はとてもこの向うの慈悲に富んだ顔に似るほどの値打ちはありません。」

私の思想！

なるほどその中には神に触れたところもありましょう。時には遠く響く天の歌の調子が聞きとれましょう。けれども私の生活はこの思想と一致していません。たゞ夢で終わりました。なぜつて、私は賤しい憐れな現実のなかで日を送つていたのですから。

私の詩が人生と自然界をよく發揮しているということですが、私はその雄大とか、美とか善とかに対して信念を欠いています。何で私の顔が似るものですか。」

二人の両眼には涙がうるむ。

日が暮れる頃、誠之助は、毎日の通りに近所の人たちに話をしてやる、みごとな草木にかこまれた説教壇に彼の詩人と共に行つた。

誠之助の説教は口からの出まかせではなかつた。力のある中味の多い人生そのものに清らかな愛の生命をふきこむものであつた。

詩人は誠之助の人物と品性は自分のこれまで書いたものよりも、もつと高尚な調子
を具えた詩であることを感じた。詩人の眼は涙に輝きながら、この尊敬すべき長者を
見上げて、こんな立派な上品な聖者の様子をした者はどこにもいないと思った。とそ
の時、彼方に黄金色の夕日を受けながら立っている大きな石の顔を見た。慈悲深さう
な石の顔と、白髪をたれた誠之助の尊く輝く顔と見くらべて詩人は思わず、

「見よ！ 見よ！ 誠之助さんこそ、大きな石の顔にそっくりだ。」
すると一同はよく見つめた。

預言は実現されたのだ。

しかし誠之助は、話がすむと詩人の腕をとって家につれ帰った。心の内ではやがて
大きな石の顔に似ている人で、自分よりも、もつと立派な人が出るだろうという希望
を抱いて。

自然は我らの最高の師である。

見よ、緑の衣つけたる大空に聳える山を。

見よ、青く高く澄める青空。

見よ、燃ゆる太陽を。輝やく星を。

見よ、一度も同じ姿せぬ雲の大きさを。

見よ、緑葉繁る谷にかかる瀧の美を。

見よ、野の花の薙を、大洋の神秘を。

大自然より、無言の教育を受けることによつてみがかれた智慧は、何物によつても
得られぬ智慧である。